現代ドイツ語における指示代名詞 der/das/die の特徴について

吉田　光演

0．序論 ― 直示表現としての der/das/die ―

直示（Deixis: 発話場面にある個物を指す）に関わるドイツ語表現としては，指示代名詞（Demonstrativpronomen）の dieser，jener が知られているが，その使用には一定の制約がある（例えば日本語「あれ」に相当する，遠距離の個物を指示する jener は現代ドイツ語では衰退しつつある）。他にも指示表現としては，人称代名詞 er/es/sie があるが，人称代名詞は主にテクスト内照応（Anapher: 先行詞とその代用表現による反復）として使用される。それらと比べると，定冠詞 der/das/die と類似した指示代名詞 der/das/die は，直示機能を重点的に担い，現代ドイツ語で多用され，教科書でもよく使われる（以下 der で代理）。しかし，指示代名詞 der の研究は意外に進んでいない。個物を指す行為は指差しに似て，単純な行為に見える。同様に直示＝個物の言語的指示も単純に見える。しかし，母語話者にとって自明でも，指示対象の制約（人か物か），遠・近，発話状況との関係（直接的知覚が可能か），直示と照応の相違・共通点など，非母語話者にとっては不明な点が多い。特に，人を指示する直示には問題があると言われる（‚unhöflich‘, ‚pejorativ‘ など（Duden 1985, Bellmann 1990））。男性名詞で指示できる物に対し，„Der gefällt mir.“（それは気に入った）と表せるからといって，近くの男性を指して，„Der gefällt mir.“ と発した場合，否定的に響く場合もありうる。では，無生物ならば問題ないか，der は dieser，er とはどう違うのか？このような問題も明瞭ではない。jener の衰退，der の多用によって，ドイツ語の指示詞は，英語の this/that のような（近･遠）二項区分や日本語の「コソア」のような（近・中・遠）三項区分を形成しない。この意味で現代ドイツ語の直示表現は対照言語学的にも興味深い。そこで本論文では，指示代名詞 der について，dieser/jener，er/es/sie と比較して，Web 等の具体例にそって，その特徴を概観し，直示と照応における問題点を抽出する。

1．直示（Deixis）としての指示代名詞 der

Bühler（1934）は，話者が，発話場面に存在する個物を言語表現によって指すことを Deixis（直示）と呼んだ。空間直示に関する表現は，Bühler が規定した Zeigfeld（指示場）において，話者の視点としての Origo（*ich, hier, jetzt*：私・ここ・今）を基準点とし，そこからの距離を示す語として語彙化

されている。以下の Web 検索例のように，指示代名詞（または名詞に付加される限定詞）dieser は，話者から近距離にある対象を指す[1)]。

（1） Dieser Platz ist im Nordend. Zusatzschild an der U-Bahn-Haltestelle soll für eine eindeutige Zuordnung zum Stadtteil sorgen.（„Frankfurter Allgemeine“, 広場の写真の説明文。直示）

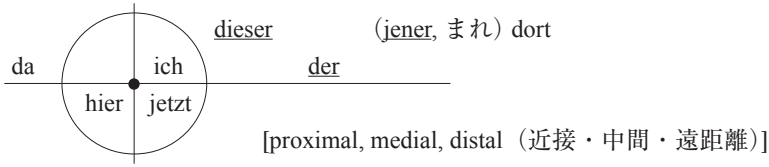
（2） **Tagungsraum Schloss**$_1$. Dieser Tagungsraum$_1$ trägt viel Geschichte in sich. Er$_1$ ist einer von zwei Tagungsräumen in dem Geburtshaus des weltberühmten Physikers Karl-Ferdinand Braun$_2$. Dieser$_2$ ist der Erfinder der Braunschen Röhre des Fernsehers.（写真・図の説明文。指標１，２は指示対象の区別のため付ける。dieser はテクスト内近接指示：照応）

（3） Mutter$_2$ und Tochter$_1$ waren da; diese$_1$ (= die Tochter) trug einen Hosenanzug, jene$_2$ (= die Mutter) ein Kostüm.（‚Duden online‘, 並列対句における近接指示（diese =「後者」））

dieser は，（1）では場面内の個物を指すが，（2）の dieser のように，テクスト内の談話対象（Diskursreferent）を指す照応表現にもなる（dieser Tagungsraum$_1$ の dieser は写真を指示する直示で，Dieser$_2$ は des..Physikers...Braun という表現が導入する対象（ブラウン管発明者）を指す照応表現である。一方 jener は，(3)のように文脈指示的に dieser = 後者, jener = 前者という対句で使われる。しかし jener は，日本語の「あれ」と対応する遠距離現場指示としては，現代ドイツ語では稀である。*jener Mann* といった直示形では使わず，過去の対象の指示として回想表現の形で使われる傾向にある（„Ich erinnere mich an jene schöne Tage.“ など）。

Lyons（1999）は，空間直示について [proximal（近距離），medial（中間），distal（遠距離）] の区別を立てた。dieser は，物理的・心的に話者から近距離にある個物を指す。Lyons は，jener は遠距離で，der は中間とするが，例は挙げていない。図示すれば次のようになろう。

（4）



1） しかし，Heusinger 2012 は不特定（不定）の対象に対して dieser が使われる例を分析している。Heusinger (2012) からの例（「こんなタイプの者」といったニュアンス）。Er traf diesen Typen, der kam grad vom Klo. Scheinbar war das ihr Freund, denn sie herzt ihn so. (Google)

場所を示す空間副詞には，hier（ここ），da（そこ），dort（向こう）という三区分があるが，da の使用範囲は非常に広く，それ自体議論の対象である（Ehrich 1982）。また，発話状況に存在する個物・人を指示する表現としては，Origo に根ざした話者―聞き手を示す１人称・２人称代名詞（ich―du/Sie）と３人称代名詞（er/es/sie），及び指示代名詞類がある（dieser, jener, der 等）。ドイツ語では，遠距離を示す jener が直示表現としては衰退しているので，dieser―jener の近遠の対立が崩れている。それに対し，指示代名詞として der（das, die）が一般的に使える。der は，距離に関して中立的であり，近接の dieser 以外の部分を担うか（中・遠距離），近接領域も表せるのか（距離に関して無標）自明ではない。また，テクストで新出名詞句と同一指示の解釈を持つ表現を再掲する際，同じ表現を反復するのでなく，er/es/sie のような人称代名詞によって言い換える照応形が用いられることが多い。しかし，指示代名詞 dieser も，（2）のように，照応表現として使用できる。

他方，指示代名詞 der も，例（5）（6）のように，会話場面に存在する個物を指す直示と照応表現の２つの働きがある。他にも例（7）のように，関係節で修飾される主部名詞を表示する関係代名詞の働きもあるが，紙幅の都合上関係節用法については触れない。

（5）　Das ist <u>mein Bekannter</u>. <u>Den</u> habe ich in Berlin getroffen (standardsprachlich: Ich habe <u>ihn</u> in Berlin getroffen.)（Duden 9, Richtiges und Gutes Deutsch, 2009. 写真を指して説明する等）

（6）　Suchst du <u>deinen Bruder</u>? <u>Der</u> (<u>Er</u>) kommt gleich.（DUDEN online. *der, er* 両方可とする）

（7）　<u>Der</u> (*derjenige, welcher*) sich immer für mich einsetzt, ist mein Freund.（DUDEN online）

DUDEN は，(5)のような der は口語的であり，丁寧でないと指摘している。しかしそれ以上説明がないので，いつどのように使えるのか定かでない。指示代名詞 der の用法については，Helbig/Buscha 2005 等の参考書でも，照応の der について触れるだけで，詳しい説明はない。その理由は，直示・照応の der が標準語的でなく，「日常会話に限定された，否定的ニュアンスを持つ」という見方が一般的だからと考えられる（Weinrich 1993）。また，限定詞的な指示用法「der＋名詞」の場合，定冠詞と形式が重なるため，der を指示代名詞と分析せず，定冠詞 der の「独立用法」とする立場もある（Gunkel 2006）。

しかし，現代ドイツ語では指示代名詞 der は一般的である。ドイツ語教育

で日常会話が多く取り上げられるようになり，それに伴い der も頻出する。次に，教科書の用例を挙げる（日本の文法書では人の指示に関する誤用と思われる例も散見される。cf. 杉原 2012）。

（8） A: Schau mal, da ist ein Regenschirm. Ich brauche einen. B: Hast du keinen Regenschirm?
A: Nein, ich habe keinen. B: Aber **den** finde ich nicht schön.（Lagune Kursbuch, Klett 2005）

（9） Hier ist der neue Wein. Der schmeckt ausgezeichnet. ここにできたてのブドウ酒があります。こいつはじつにうまいんだよ。（ミッヒェル・樋口他「これからのドイツ語」，郁文堂，1980）

（10） Arbeiten Sie noch mit den Leuten zusammen? - Nein, mit denen will ich nichts mehr zu tun haben. まだあの人たちと一緒に仕事をしているのですか。ーいいえ，もうあんな人たちとはかかわり合いたくありません。（同上）

（11） A: Entschuldigung, wie viel kostet der Salat?
B: Der kostet 50 Cent. A: Ganz schön teuer!
（Braun 他，„Ach so, Neu“，同学社，2008）

（12） A: Siehst du den Typ da? あそこにいる人が見える？
B: **Den** kenne ich nicht. Wer ist das? あの人のことは知らないな。あれは誰なの？
「定冠詞の独立用法。定冠詞は単独で指示代名詞として用いられる。通常は文頭に置き，アクセントを置く。」（「ドイツ語の基本」（三修社），Reimann, M. *Grundstufengrammatik für Deutsch als Fremdsprache*, Max Hueber 1999 の翻訳。同書では「jener/jene/jenes は現代ではあまり使われない」ことも指摘している。）

（8）（9）（11）の会話のように，商品を指示する際に使う直示の der は一般的である。強勢アクセントによって焦点化されることが多いが，その場合，先行文脈がなく，複数の候補があっても，場面にある個物を指し示して聞き手に個物を特定させることが可能である。（8）のように，話者が話題化した ein Regenschirm が示す対象を，相手が den によって再度指すことによって，当該の対象が選択的に取りだされる。der に関しては，遠近の距離についての制限はないので汎用的であると言えよう（dieser は通常，近接指示的であり，jener は遠距離直示には使えない）。このことも会話で良く使われる理由になる。

直示の der は，定冠詞 der による同定とは機能が異なる。歴史的には，定

冠詞 der（das, die）は指示代名詞の場面直示から発達してきたと言われる（Lyons 1999, Leiss 2000, Abraham 2007）。定冠詞＋名詞は，話者と聞き手共通の知識の中で対象が確立され，話者・聞き手の間で同定済みで，共有知として蓄積されている対象，旧知・既知の対象（先行知識・文脈によって談話に導入され，一義的に同定可能な対象）に対して使われる（Löbner 1985, Lyons 1999）。die Erde, der Mond など，世界に一つしかない唯一名詞に付く定冠詞や，der Hund（犬という種）など，種名詞に付く定冠詞が前者の典型で，唯一物として定の解釈が成り立つ。また，複数の個物がからなる範疇（普通名詞）でも，先行文脈によって対象が定まる場合は既知の対象の照応関係が成立する（Ich habe eine CD gekauft. Die CD war...（私が買った CD））。ここでは，聞き手が曖昧性なしに一義化できるということが重要であり，聞き手にとって対象が物理的に知覚できるかどうかは重要ではない（Löbner 1985）。その中には，連想的な定の用法（先行文脈に現れていないものでも個体―所有関係，全体―部分関係などによって，指示対象の確定が聞き手に理解されるもの）も含まれる。つまり，表現によって，指示対象が決まるという関係性を話者・聞き手が把握できればよいのである。

（13）Ein Auto fuhr vorbei. Die Bremsen/*DIE Bremsen quietschten.（車が通りがかった。車のブレーキがきしんだ）（Gunkel 2006。アクセント付定冠詞は連想的定用法には使えない）

（13）は定冠詞 die＋名詞からなる名詞句を含む。「車 Auto にはブレーキ Bremsen が所属物として付いている」という常識によって「通りがかった車のブレーキ」という所有関係（a → b の連想用法）が成立し，聞き手は他の車のことは念頭に入れる必要がない。これに対し，指示代名詞解釈として die に強勢アクセントを置くと，「他にも車があって，それらのブレーキが複数個ある」という前提が与えられ，その中の「問題になった車のブレーキ」という選択に基づく強調が生じ，奇妙な解釈になる。一方，（9）の「ワイン」の場合，複数候補からの選択に直示の意義があり，他のワインと違って当該のワインが強調される。

指示代名詞 der がどんな場面で使用されるかについては十分検討されてこなかった。その結果，不適切と思われる使用も生じる。特に人間が対象となる場合であり，眼前に指示対象となる人間が見える場面で，直示詞 der, die を用いることは語用論的に不適切になる（「あいつ」といった侮蔑的な含意が生じる可能性がある。これは人称代名詞 er, sie の場合にも場面指示の際に注意すべきことである）[2)]。ただし，紹介・導入の際の „Das ist (sind)...“ の指示代名詞 das は，非常に一般的な直示表現であり，個物・人による相違は生

じない（性の区別・数の区別すらない）。

2．文脈照応的な指示代名詞としての der

人称代名詞 er/es/sie がテクスト内の対象を受ける照応表現として使われるように，指示代名詞もテクスト内で文脈照応用法として使える。この場合も会話体が多いが，直接の発話状況に談話対象が存在する訳ではないので，人間であっても否定的含意は伴わない。

（14）Sind wir dahingegangen. [Die Schwiegermutter]$_{+th}$, [die]$_{th}$ ist mitgegangen, [die]$_{th}$ ging mit, die Alte. Aber [die]$_{th}$ ist nachher abgefahren. (E. Runge, Bottroper Protkolle (Clemens K.), 14)) (Zifonun et al. 1997, 560) 「二重テーマ化」（左方転移 Linksherausstellung: 名詞句 + die）

（15）Da <u>er</u> mit seinen 9 Jahren keinen Kinderwecker mehr möchte, habe ich <u>ihm</u> einfach <u>einen Fotowecker mit Sprachaufzeichnung</u> bestellt. **<u>Den</u>** finde ich richtig gut, denn <u>der</u> ist sehr persönlich.（Web 検索例。人称代名詞 er, ihm と不定名詞句・指示代名詞 den の併用）

（14）は，談話話題として die Schwiegermutter が冒頭に導入され，それと照応する形で指示代名詞 die が使われる（この構文は左方転移と呼ばれる）。この場合の前域の die は，人称代名詞 sie で代用できない。しかし，２回目以降も照応的に die が使用されている。このように，会話では人称代名詞の代替として指示代名詞が使われる場合がある。（15）のように，テクスト内で人称代名詞による照応関係と指示代名詞による照応関係が併用され，二つの対象を区別するために異なる関係が表される（息子を人称代名詞 er, ihm で受け，目覚まし時計を den で照応）。このような der の用法は，詳しく分析されていなかったが，近年注目が集まっている。そこで次節では，der の先行研究について振り返ってみよう。

3．指示代名詞 der の先行分析

3．1　直示としての der の分析

dieser に対して，中立的直示の der に関する研究は少ない。Eisenberg（1989）

2）１人称・２人称代名詞は直示用法として当然使える。また，３人称代名詞 er, sie も対象指示の際に曖昧性が生じない場合は，人間に対する直示として使用できる。疑問文の „Was macht er?“, „Wer ist sie?“ などである。また，Weinert 2007 は会話コーパスの分析によって，指示代名詞 der, die による直示では，否定的ニュアンスは量的に多くはないと論じている。

は，限定代名詞（Determinativpronomina）に所属する要素として定の代名詞を挙げ，さらに指示代名詞（Demonstrativa）と所有代名詞に分け，前者の例として dieser, jener, der を挙げている。

（16）　限定代名詞　（Eisenberg 1989: 198）

定（DEF: 指示代名詞，所有代名詞）　不定（不定代名詞）
dieser, jener, der...　meiner...　mancher, einiger, jeder

指示代名詞 der は，定冠詞 der と似ているが，定冠詞変化は弱形変化であるのに対して，指示代名詞の変化語尾（性・数・格）は強形であり，この点は関係代名詞と同形である（指示代名詞，単数・男・中性属格 dessen（定冠詞：des），単数・女性・属格 deren（定冠詞：der），複数・属格 deren（付加語的），derer（定冠詞：der），複数与格 denen（定冠詞：den）。限定代名詞という用語は実際には曖昧であり，限定用法と独立用法の２つに分かれる。限定用法では定冠詞と同じように名詞に付く（dieser Wagen/der Wagen）。独立用法は人称代名詞と同様に独立的である。統語論的構造としては，限定詞句（DP：determiner phrase）分析によって，２つの異なる構造が設定できる（DP 構造については Abney（1987）参照）。

（17）a. $[_{DP}\ [_{D'}[_{D}$ dieser$]\ [_{NP}$ Wagen$]]$ b. $[_{DP}\ [_{D'}[_{D}$ der$]\ [_{NP}$ Wagen$]]$（D=Determinator）
c. $[_{DP}\ [_{D'}\ [_{D}$ der$]\ [_{NP}\ \phi]]$（der は車に属する集合要素 {a, b, c...} から要素 a を選択）

限定詞 D は個体指示と関わる統語範疇であり，（17c）のように独立用法の場合でも，名詞範疇（Wagen「車」）の具体的対象は文脈的に話者により決定され，定の解釈になる。

指示代名詞 der の意味解釈としては, Duden (2006, 2009), Zifonun et al. (1997) 等の記述では，① 物を指す時，口語体では指示代名詞 der がよく使われ，② ほとんどの場合強勢アクセントを伴い，③文頭（前域）に配置されることが多い。④人に対して使用された場合，侮蔑・否定ニュアンスを伴うことが多い，と記述されている。

これに対して，Web で検索した，次のような読者の投稿欄での der の例を見ると，必ずしもこのような特徴が絶対的ではないことが分かる。（18）の引用では，der は（der junge Mann dort を簡略化した）省略であり，驚きの含意は伴うが，否定的かどうかは定かではない。しかも人称代名詞 er の置き換えは不可能である（*er dort では句を形成できない）。

（18）Erstaunt: „Was macht denn der dort?“ - Hier kann man nur die volle Form sagen, zum Beispiel: „Was macht denn der junge Mann dort?“ In diesem Fall ist „der“ aber nicht Ersatz für das Personalpronomen, sondern elliptisch für „der junge Mann“. Außerdem fehlt dann die Kennzeichnung des Erstaunens in dem Satz.（Web 検索例。人称代名詞による置換不可能）

こうした例を見ると，否定的に感じる人，感じない人，地方差，年齢差，個人差があり，揺れがあると思われる。しかし，この点はさらに具体的な分析が必要である。

３．２　照応表現としての der の分析

文脈照応でも，der は使用できるが，口語的な文体になり，人間を指示する際には, 否定と肯定のニュアンスがあると言う（Zifonun et al. 1997）。次は，Web 検索例である。

（19）WDR　Lindenstraße Zuschauerpost 2012/3　Sympathien vs. Antipathien（Web コメント）

（a）Frannie, wie steht es bei dir mit dem Doktor Stadler? Den finde ich voll sympathisch.（肯定）

（b）Ich finde es gut, dass jemand nochmal den Egon Kling als Lieblingsdarsteller genannt hat, ich fand den auch immer überaus sympathisch und sehr gut dargestellt und (...)（肯定）

（c）(...) Ja, und die bayrische Dümmlichkeit Ines - die hat mir echt den letzten Nerv geraubt!（否定）

（d）(...) Und diese Dani mit dem roten Koffer mochte ich nicht. Ich war froh, als sie an die Antarktis umzog. Und natürlich Chris Barnsteg. Wegen der habe ich mal zwei Jahren Lindenpause gemacht. Ich konnte sie nicht ertragen.（否定）

（19a-d）の der は，前文に現れた対象である人を指す照応表現であるが，der が肯定的か否定的かは結局，関連する文の述語に左右される。また，（20b）のように，文頭でない中域の位置でも den が現れている（（19d）は属格で wegen に後続：*wegen der*）。また，（19d）の *diese Dani*（「この Dani ってやつは」という含み）のように，固有名詞に付き，対象選択の必要のない場合でも感情的に話者の世界に引き寄せる場合に，diese が使われるのは興味深い。照応用法の der は比較的議論されており，以下のように「照応機能を持つ直示（Anadeixis）」の役割についても記述されている（Zifonun et al. 1997,

Tanaka 2011）。

（20）Anadeixis（照応直示表現）の der の機能（Zifonun et al. (1997) IDS, 558）：人称代名詞も Anadeixis も（テクスト中の）テーマ進行に役立つが，その仕方は異なる。人称代名詞は，テーマ（話題）が確立済みで，新規の方向付けが不必要な場合に使用され, 前の先行発話で既に話題になっている場合を指示することが多い（=22）。

（21）[話題$_1$ … NP$_2$...] [人称代名詞$_1$ ...]　（人称代名詞による照応）
（22）[話題$_1$ … NP$_2$] [指示代名詞$_2$ ...]　（指示代名詞による照応）

Anadeixis（照応的直示）は，（22）のように，先行文脈において，①該当対象がはじめてテーマ化される，あるいは文の焦点としてレーマ（新情報，意味の焦点）になっている場合, ②該当対象が他の, 前に言及された話題と「競合」状態にある時に使用される。すなわち，焦点領域の中で，近い距離・直前で照応形の先行詞が存在する。（Zifonun et al.1997）
例えば，次のような例である。

前文の焦点領域（近接）

（23）(...) [sie]$_{th1}$ betrachten [eine Leibwache von Katholiken]$_{+th2}$ mit, und [diese]$_{th2}$ erholen den Anspruch, näher am Wagen zu reiten als die Hugenotten.（H. Mann, Die Jugend des Königs HenriQuatre, 18, Zifonun et al. 1997）

（24）Wir haben noch genügend Zeit, bis wir Remion erreichen. Bis dahin kremple ich euch ...
»Ja, ich habe **Gründe**, aber **die** möchte ich im Moment nicht erläutern.«
（Perry Rhodan, *Ara Toxin 3*, Web 検索例）（継続話題＝ ich/wir, 新規話題＝ Gründe ）

このように，テクスト内照応直示の der は，先行する文の右側＝レーマ領域で近接性を利用した照応関係を作る。Bosch et al. 2003, Bosch & Umbach 2007 でも，人称代名詞は，談話で卓越した（取り立てる必要もなく確立された）話題と照応し，指示代名詞は，これから焦点化されるべき対象と照応する関係であると述べ，（25a,b）のパタンを挙げている。これらの研究は，Centering 理論を援用し，先行詞と照応形の階層（代名詞＜指示代名詞＜名詞句の順），文中の役割（目的語に対する主語の優位），話題関係の推移（話題転換＜話題継続）を重要視している（Bosch & Umbach 2007, Tanaka 2011）。

(25a) $\underline{\text{Peter}}_i$ wollte mit Paul_k Tennis spielen. Doch $\underline{\text{er}}_{\{i,k\}}$ war krank.（主語 Peter と照応し易い）

(25b) Peter_i wollte mit $\underline{\text{Paul}}_k$ Tennis spielen. Doch $\underline{\text{der}}_k$ war krank.（近接 Paul との照応のみ）

（Bosch & Umbach 2007, 先行詞との距離に基づく照応）

テクスト照応における指示代名詞は，内部照応として談話の流れの中で，照応の典型である人称代名詞 er/es/sie に対する有標化（= 強調･対比･焦点化）として理解できるのか，それとも，現実的発話状況における直示関係が談話に投影されたものか，即ち指示代名詞 der を使う時点で，近距離にある言語表現の指示対象を指す外部照応なのか，二つを複合的に組み合わせているのか，定かではなく，理論的にも実証的にも課題となる。

4．指示代名詞 der の指示作用（直示・照応）の特徴

Zifonun 1997, Bosch et al. 2003, Bosch & Umbach 2007 など，先行研究でも der の分析は一定程度なされていることを見た。しかし，その分析が本当に適切であるのか，適切であれば，なぜそうなのか（人の直示表現は否定的なのか，だとするとなぜ？），人称代名詞との照応パタンの区別は，実際に先行研究通りなのかといった点についての検討は十分にはなされていない。そこで本節では，これら従来の説を再度検討してみる。

(26)「指示代名詞 der は文頭（前域 Vorfeld）に出やすい」という指摘について。実例でも，確かに文頭（話題）位置が多い傾向は伺える。しかし，文中（中域）でも der は現れる。その場合は，必ずしも強勢アクセントを伴わない。従って，文中の der は対比的・選択的意味合いは少ないと考えられる（人称代名詞の有標的な代理）。

(27)「直示用法では，指示代名詞は人に対して使用される場合，否定的ニュアンスを伴う」という指摘について。der に否定的ニュアンスが加わる場合もあるが，上述のように，肯定・共感が含まれることもある。直示では，両極的であるが，感情的含みが伴う傾向は多いようである。共感・感情移入によって，発話の際に話者の注意の領域へと心的な移動が生じていると考えられる（話者の情緒移入による選択的注意＝近接指示）。

(28)「照応用法では，指示代名詞 der は，前文の焦点（レーマ）である後方の表現と照応する」という指摘について。この用法によって，指示代名詞は機能的に人称代名詞と区別されるが，実際のデータでは話題継続の場合もあり，いくつかのパタンがある。

（29A）話題$_1$（主語）… 焦点$_2$ ← Den/Das/Die$_2$ …（話題転換，焦点を話題に転換）

（29B）話題$_1$（主語）…（焦点$_2$）← Der/Das/Die$_1$（主語）…（話題継続：会話的・有標的）

（29C）話題$_1$（目的語）… 主語$_2$ ← Den/Das/Die$_1$ …代名詞$_2$（話題継続：構文平行的）

（29D）話題$_1$（主語）… 焦点$_2$ ←（話題$_1$）… den/das/die$_2$ 中域 …（話題継続，中域の der）

実際の検索例を次に見ていこう。

（30）Ich habe schon seit seinem ersten Auftritt eine ganz große Schwäche für Smoker$_1$, und den$_1$ finde ich nach wie vor unglaublich cool in all' seinen Wandlungen.（Web,（29A）タイプ）

（31）Ich war heute mit meinem Sohn$_1$ nach den Schulranzen$_2$ gucken. Da er$_1$ so klein ist, kommen für ihn$_1$ Modelle in Frage, einmal den Ergobag$_{2'}$, den$_{2'}$ finde ich so klasse, oder den ergo light 912$_3$, diesen$_3$ findet mein Sohn$_1$ toll.（Web, 人称代名詞照応・（29A）タイプ）

（32）Neue Ausgabe, alter Inhalt$_1$, aber der$_1$ ist großartig.（Amazon コメント，（29B）タイプ）

（33）Seinen Titel$_1$ hat der Verlag$_2$ ausgesucht, und den$_1$ finde ich$_3$ einfach nur toll. Er$_1$ passt zum Buch und klingt für mich$_3$ unwiderstehlich.（Web,（29C）タイプ変形）

（34）Ich hab nach dem Hersteller$_1$ gesucht aber hab den$_1$ nicht gefunden.（Web,（29D）タイプ）

（35）Mein Freund hat von Finnair eine interessante E-Mail$_1$ zum Thema Wein bekommen, warum habe ich die$_1$ nicht bekommen?（Web,（29D）変形（話題変更））

これらの例は，上の観察（29A～D）にほぼ対応している。疑問文タイプの制約などもあり，中域に指示代名詞が生じる例もある（=35）。また，（33）の例は（29C）に対応するが，先行する文の話題が対格で現れ，主語は後続している。第二文では，指示代名詞で対格話題を保持しつつ，それを強調するが，主語は話者（ich）に転換している。第三文で，漸く話題が対格から主格の人称代名詞に切り替わり，照応的に継続するというダイナミックな照応手段が使用されている。話題を際立たせる構文タイプの平行性（対格話題―指示代名詞による対格話題）と，主語卓越文（人称代名詞主格）が組み合

わされている。(33)を翻訳すると「そのタイトルを出版社は考え抜いた。で，それは私には素晴らしいとしか言いようがない，それは本にピッタリで，私には抵抗しがたいほど良く響く」といった形で，ソ系の「それ」を利用するしかない（der, er のような指示・照応形の変異が日本語にはない）。

実際の量的・質的分析が必要となるが，このような der によるテクスト照応の特徴は，指示代名詞 der が，（遠近）距離に関して中立的な直示表現であるという，次のような特徴から導き出せると思われる。

(36) ドイツ語 der は，話者から中立的距離にある直示表現であり，話者の知覚領域に見える複数の個物の中から，物理的・心理的に強い印象を与える個物を選択して強調する。この選択の性質から照応用法も導かれる。会話での der 多用はこの特徴から帰結する。

(37) 人間への der の使用における否定ニュアンス・親近性等の情緒付与。発話状況内で, 個物として人間が関与する場合, ich, du, Sie など１人称・２人称代名詞は話者・聞き手に関わるので問題ない。しかし，人を３人称として扱う際は，関与者が発話状況にいないか，発話を聞いていないか（聞こえる場合は固有名詞を使うなど），配慮する必要がある。眼前の人物を３人称代名詞 er, sie で直示的に指し示すのは不自然である（„Herr Professor Dr. Meier.../ Er ist...“ というように先行詞を介した照応代名詞は問題ない）。直示として特化された der も，基本的に話者・聞き手から区別された３人称の領域として定位される。その中で目立つ存在として特徴づけられ，物か人かの区別はない[3)]。このため，遠距離位置にいるべき人物が der/die と強調されると，「あいつは ...」と否定ニュアンスが出る。逆に，発話場面にいないが，知人が心理的に近距離にいる人として焦点化されれば,「あの人は ...」と親近感のこもった表現となる。しかし，会話で直示形が談話に浸透するラフなスタイルが好まれる場合は，指示代名詞は単に人称代名詞 er/sie の代替程度の意識で使われる（Weinert 2007）。一方，近接直示の dieser は，人間に対して単独ではあまり現れないように思われる（dieser + 人の付加語タイプはあるが，dieser + 述語は，人ではさほど多くない（„Dieser ist tot.“ のような強調例は見出される）。

---

3) Starke（1996）が指摘するように，並列，前域生起等の点で，人称代名詞 er, es, sie は，人間と人間以外の区別に関して敏感である。例えば Maria hat ihn und den anderen eingeladen. (ihn=Karl) vs. *Maria hat ihn und den anderen repariert.（後者は非文。ihn=den Wagen）。人を表す er, sie は強形代名詞で, 物の場合は弱形である（Starke（1996））。一方，指示代名詞 der は常に強形である。

（38）照応パタンの変異はあるが，人称代名詞との関係では，直示表現が指す先行詞が近接範囲にあるという直示の特徴が照応パタンを特徴づけている。直示的方向性が前提され，対象が指示空間の中にあること，従って無理なく認知できる状態になる。Zifonun et al.（1997）の説明によれば，「照応直示的な手続きは，直線的連鎖が後ろ向き方向に，（談話の）右から左へとレーマ領域の中に探し出される」時に効果的になる。

5．結語に代えて

指示代名詞 der の分析については，理論的・実証的な研究がまだまだ不足している。上記で検討した内容についても，具体的・実証的なコーパス分析が必要であるが，（29A-D）と人称代名詞の組み合わせは，教材作成，ドイツ語学習の際にも応用できる内容であり（特に話題転換の有効な手段），少なくとも誤った予測に基づく誤用の回避には役立つだろう。

参考文献

Abney, S.P. (1987): *The English noun phrase in its sentential aspect*. Ph.D dissertation, MIT.

Abraham, W. (2007): The discourse-functional crystallization of the historically original demonstrative. In: Stark, E. et al. (eds.): *Nominal Determination*. Amsterdam: Benjamin, 241–256.

Bellmann, G. (1990): *Pronomen und Korrektur. Zur Pragmalinguistik der persönlichen Referenzformen*. Berlin/New York: de Gruyter.

Bethke, I. (1990): *der, die, das als Pronomen*. München: Iudicium.

Bosch, P. et al. (2003): Demonstrative Pronouns and Personal Pronouns. German *der* vs. *er*. *Proceedings of the EACL 2003*. Budapest. Workshop on the Computational Treatment of Anaphora.

Bosch, P. & Umbach, C. (2007): Reference Determination for Demonstrative Pronouns. In: B. Dagmar & N. Gargarina (eds.): *Intersentential Pronominal Reference in Child and Adult* Language, ZAS Papers in Linguistics, No 48. (ZAS), 39–51.

Bühler, K. (1934, 1982): *Sprachtheorie*, Stuttgart, New York: Gustav Fischer Verlag.

Duden (1985): *Richtiges und gutes Deutsch. Wörterbuch der sprachlichen Zweifelsfälle*. Mannheim: Dudenverlag.

Duden (2006): *Grammatik der deutschen Gegenwartssprache*. Mannheim: Dudenverlag.

Duden (2009): *Die Grammatik: Unentbehrlich für richtiges Deutsch*. Mannheim: Dudenverlag.

Ehrich, V. (1982): Da and the System of Spatial Deixis in German, In: J. Weissenborn/W. Klein: *Here and There. Cross-linguistic Studies on Deixis and Demonstration*, Amsterdam: Benjamins, 43–63.

Eisenberg, P. (1989): *Grundriß der Deutschen Grammatik*. Stuttgart: Metzler.

Gunkel, L. (2006): Betontes der. In: E. Breindl et al. (eds.): *Grammatische Untersuchungen. Analysen und Reflexionen. Gisela Zifonun zum 60. Geburtstag*. Tübingen: Narr, 79–96.

Helbig, G./Buscha, J. (2005): *Deutsche Grammatik*. Berlin/München et al.: Langenscheidt.

Heusinger, K.v. (2012): Referentialität, Spezifizität, und Diskursprominenz im Sprachvergleich. In.

L. Gunkel (ed.). *Deutsch im Sprachvergleich - Grammatische Kontraste und Konvergenzen*. Berlin/New York: de Gruyter, 417–455.

Leiss, E. (2000): *Artikel und Aspekt*. Berlin/New York: de Gruyter.

Löbner, S. (1985): Definites. *Journal of Semantics* 4: 279–326.

Lyons, Ch. (1999): *Definiteness*. Cambridge: Cambridge University Press.

杉原めぐみ（2012）:「ドイツ語のダイクシス研究　—der, er, dieser, da を中心に—」，広島大学総合科学部，平成23年度卒業論文.

Starke, M. (1996): Germanische und romanische Pronomina: stark – schwach – kritisch. In: E. Lang/G. Zifonun (eds.): *Deutsch – Typologisch*. Berlin/New York: de Gruyter, 405–427.

Tanaka, Sh. (2011): *Deixis und Anaphorik. Referenzstrategien in Text, Satz und Wort*. Berlin/New York: de Gruyter.

Weinrich, H. (1993): *Textgrammatik der deutschen Sprache*. Mannheim: Dudenverlag.

Weinert, R. (2007): Demonstrative and personal pronouns in formal and informal conversations. In: R. Weinert (ed.): *Spoken Language Pragmatics*. London & New York: Continuum 1–29.

Zifonun, G. et al. (1997): *Grammatik der Deutschen Sprache*. Berlin/New York: de Gruyter.

Semantische und pragmatische Eigenschaften der Demonstrativpronomina *der/das/die* im Gegenwartsdeutsch

Mitsunobu YOSHIDA

In vielen Sprachen sind deiktische Ausdrücke auf Grund der *Ich-Jetzt-Hier*-Origo, die in der Äußerungssituation vom Standpunkt des Sprechers aus den Nullpunkt des Bezugssystems bildet, motiviert und lexikalisiert worden (Bühler 1934) . So scheint es zuerst selbstverständlich zu sein, dass sich Demonstrativpronomina durch die Distanz-Merkmale „proximal vs. distal“ (englisch: *this/that*) , ferner durch „weder proximal noch distal“ (japanisch: *kore/are* und *sore*) unterscheiden. Auf das Deutsche treffen diese Merkmale auch zu, allerdings auf etwas kompliziertere Weise. Das distale *jener* ist heutzutage veraltet und der Gegensatz zwischen proximal und distal (*dieser/jener*) ist schon verloren gegangen. Stattdessen sind die den bestimmten Artikeln ähnlichen Demonstrativpronomina *der/das/die* (d-Pronomina) ins Verweissystem eingedrungen, so dass sie im Gegenwartsdeutsch als übliche deiktische Ausdrücke vorkommen. Problematisch ist es jedoch, dass ihr Gebrauch noch nicht gründlich erforscht wird und sogar ab und zu verurteilt wird, so dass der Verweis auf eine Person mit *der/die* als negativ (‚pejorativ‘) wirkt (Weinrich 1993) . Des Weiteren lassen sich d-Pronomina neben Personalpronomina anaphorisch verwenden, so dass sie für die Deutschlernenden schwer zu verwenden sind. In diesem Aufsatz versuche ich zu klären, ob die in der Literatur genannten Eigenschaften der deiktischen d-Pronomina den Daten gerecht werden, insbesondere ob ihr negativer Effekt für den Personengebrauch oft auftritt, und welche anaphorische Rolle d-Pronomina im Text spielen.

Einige Recherchen in Web-Texten zeigen, dass d-Pronomina auch unbetont im Mittelfeld vorkommen, obwohl sie in vielen Fällen betont im Vorfeld auftreten, worauf die Literatur schon hinweist. Zweitens: der negative Effekt der d-Pronomina bei der Person-Deixis ist nicht sehr relevant, d.h. auch der positive Eindruck kann damit durchaus erfolgen. Drittens: D-Pronomina werden im Text häufig verwendet, um durch den Bezug auf den Rhemabereich des Vorgängersatzes den Themawechsel zu fördern („Peter$_1$ wollte mit <u>Paul</u>$_2$ Tennis spielen. Doch {er$_1$/<u>der</u>$_2$} war krank.“ Bosch & Umbach 2007) , oder um einen thematischen Parallelismus herzustellen („<u>Seinen Titel</u>$_1$ hat der <u>Verlag</u>$_2$ ausgesucht, und <u>den</u>$_1$ finde <u>ich</u>$_3$ einfach nur toll.“), was im Deutschen zusammen mit Personalpronomina *er/es/sie* eine besonders starke Ausdruckskraft verleihen kann.